栞集を読む

松岡　隆子

冬ぬくし二人並んで飯食べて　　田辺　文枝

二人並んで食事をとるということは、取り立てて言うほどのことでもなくごく平凡なことである。だがその平凡な日常こそ幸せなのである。もし相手が体調不良で入院するようなことでもあれば一人で食事をしなければならない。同時作に〈日だまりへ夫を誘ひて日向ぼこ〉があるが、労わり合える相手がいることは有り難い。二人で居ればそれだけで〈冬ぬくし〉なのである。

うすらひの水面に消ゆるほどの風　　鈴木　富代

春は名のみで再びぶり返した寒さに早朝の池はうっすらと氷が張っている。それはだんだん日が差して気温が上がってくると次第に解けてやがて消えてゆく。水面を吹くわずかな風にすーっと消えてゆく薄氷は儚く美しい。薄氷の消える一瞬を繊細なタッチで描いていてうつくしい。〝うすらひ〟という平仮名表記もこの句に適っている。

大寒の朝やピアノの積まれゆく　　西島　美晴

大寒の朝の張り詰めた寒気の中をピアノがトラックの荷台に積みあげられる。真っ黒なピアノの冷え冷えとした感触が伝わってくる。つややかに黒光りするピアノは冬帝のもとへ運ばれていくのかもしれない。大寒のピアノはそれ自体に詩がある。

せめぎあふ河口の波や寒土用　　小泉　恵子

小泉さんは富山市在住の方である。掲句の川は富山湾へ流れる川と知ると、河口の波の鬩ぎ合いの激しさが見えてくる。冬の日本海は暗く波が荒い。河口では海に流れ込もうとする川波とそれを押し返そうとする海波の激しい鬩ぎ合いになる。寒土用の厳しい寒さの中、河口に渦巻く波の勢いは恐ろしいほどになる。実景を的確に描写している。

迷ひては手のひらほどの日記買ふ　　見上　恵

書店の店頭には様々なデザインの日記が並んでいる。作者は迷った挙句小さな日記帳を買った。手帳サイズのものだろうか。今まで使っていたものと比べると手の平ほどにしか見えないという。今までは五年日記か十年日記を愛用されていたのかもしれない。十年日記を使っていた家人も80歳の頃五

年日記に変えた。この次は小さい日記帳になるかもしれない。少し淋しい気もするが齢に添って自然体で生きればよいと思う。毎日日記を書き続けることは素晴らしい。

生徒らに追ひ越されゆく霜の道　　宮当　信行

霜の道を学校へ急ぐ。「おはようございま～す」と次々と生徒たちが追い越してゆく。元気な声が霜晴れの空に響く。友達と話しながら半ば駆けるように通り過ぎてゆく生徒たち。明るい登校風景が素直に描かれていて気持ちが良い。

捨てられし子猫にミルク添へありぬ　梅澤　惇子

段ボールの箱に子猫が捨てられていた。後日談によるとまだ目も開かない生まれたばかりの子猫だったという。添えられたミルク瓶に捨てざるを得なかった人の心情が思われる。「それで…」と尋ねると「はい、飼うことにしました」という応えが返ってきた。子猫の命をめぐっての心温まる話。

幼子に負けん気出づる冬木の芽　　渡部　順子

ミルクを飲んで眠っている頃の赤ん坊はみんな同じように可愛いが、成長するにつれて個性が出てくる。何でも自分でやりたがる児、積み木が高く積めないと悔しがる児、おもちゃの取り合いになると決して譲らない児。幼子に出てきた負けん気はどこか冬木の芽に似ている。枯木の間は同じように見えた木も芽が出て若葉青葉になるとそれぞれの木になってゆく。負けん気のある児もない児もすくすくと育っていくことだろう。

土筆摘む私鉄電車が通り過ぎ　　浅尾　泰昭

この句の眼目は私鉄電車。私鉄電車ということから郊外ののどかな春の景色が見えてくる。川沿いの土手には土筆が生え蒲公英や犬ふぐりが咲いている。土筆を摘む手に春風がやさしい。籠いっぱいに摘んだ土筆を持って家に帰る。子どもの頃の回想の一句かと思う。

その他の印象句

剪定を終へてうとうと夫の昼　三宅まどか
寂しさを紛らしてをり梅香る　早出　誠治
この指の記憶がたより毛糸編む　高野　達子
漕ぎ出でて春の水路を濁しけり　安達みわ子
極寒の最上川の流れ透き徹り　矢作　裕子
自粛とふありあまる刻春愁ひ　小川テル子
富士山が近く見ゆる日風光る　桑原　和子
仏前に枡いつぱいの福の豆　眞保　勝江
お招ばれの男の子も正座雛まつり　高橋いはを
雛の夜昔のやうに母と寝て　長田　淳子